

フィリピン・ネグロス島における養蚕事業を通じた貧困緩和対策の実態と効果 ーオイスカの養蚕プロジェクトを事例としてー

永石 安明

研究の目的と方法

フィリピンの貧困は基本的には農村の貧困であるといえる。なぜならば、総貧困層の 75% の人口が農村地帯に住んでいるからである。特にネグロス島では、スペイン時代から続く大農園制度（アシエンダ）による不平等な土地分配の影響で、1988 年当時、西ネグロス州の全私有地面積の 4 割弱が、同州の全土地所有者数の僅か 1.9% の富裕層によって所有されていた。このような土地の不平等分配による慢性的な貧困に加えて、1984 年から始まった国際的な砂糖相場の暴落により、西ネグロス州の砂糖産業が打撃を受け、多数の農民が貧困の極に達した。砂糖キビ農園は単一栽培方式であり、砂糖キビ栽培を放棄した後の農地を他の作物に転作することは、短期間にできることではなかった。従って、不景気になると同時に砂糖キビ農園は閉鎖、休業に追い込まれた。この結果、そこで雇用されていた農園労働者は、他の仕事に従事する能力も土地も無いため、収入源を失い貧困が深刻化した。

この時、西ネグロス州では、砂糖キビ労働者とその家族に対する食糧や医薬品の緊急支援活動が、フィリピン政府、国際援助機関によって行なわれた。しかし、多くの農民は砂糖キビ農園の労働者としてしか働いておらず、一般的な農業を行なう知識や資金が不足していた。砂糖産業の破綻で貧困が深刻化した背景には、農民が自立しておらず、農園の単純労働者でしかなかったことが大きな原因として挙げられる。

このような問題を解決するために、フィリピン政府により、農業の多角化を目指した様々な取り組みがなされた。その中で注目されたのが、養蚕事業によって貧困を緩和しようという試みである。当時のフィリピンにおいても、政府関係機関などによる養蚕の普及事業が実施されていた。しかし、目に見えるほどの成果は上がっていなかった。そのような状況の中で、唯一日本の NGO である財団法人オイスカによる養蚕プロジェクトは軌道に乗り、ここで生産される生糸がフィリピン国内産生糸の約 8 割を占めるに至った。

このプロジェクトでは、地元の農村青年を研修生として毎年数名受け入れ、養蚕を中心に複合的な農業研修カリキュラムを実施している。ネグロス島の中山間地の農家に桑の栽培指導を行ない、蚕の飼育、繭の生産管理法などを指導し、その繭をオイスカが運営する製糸工場で製品化（生糸）して市場に販売している。そして、これらの一連の活動を通じて自立農民を育成している。このような状況から、オイスカによる養蚕事業の手法は、他の援助機関が貧困緩和対策を進める上で参考になるといえるが、これまで、その実態と効果について研究されたことはない。従って、本研究の目的は、オイスカが実施したネグロス養蚕プロジェクトの実態と、それによる効果を明らかにすることである。得られた結論

から、今後の貧困緩和対策に向けた課題を整理し、提言を行なう。

研究の方法としては、まず、ネグロス島の貧困概況を、参考文献を基にフィリピンの歴史的背景から解説し、その社会構造的な貧困問題を述べる。次に、フィリピンにおける養蚕の概要を、その歴史と地理・気候的条件および、養蚕・絹産業に関わっている関連団体（政府機関、民間事業体を含む）について、文献や現地関係者へのインタビュー、政府ホームページなどを基に解説する。また、ネパールで JICA が実施した「養蚕振興計画」の報告書を基に、フィリピンとネパールにおける養蚕・絹産業の相違点を明確にし、フィリピン養蚕業の改善点を見出す。オイスカのネグロス養蚕プロジェクトを通じた貧困緩和対策の実態と効果を、JICA 開発パートナー事業「ネグロス養蚕普及事業」終了時評価報告書と、筆者の養蚕農家への聞き取り調査結果に基づいて論証する。さらに、現地プロジェクト・スタッフへのインタビュー及び各種政府統計資料も参照して、その実績を解明する。

論文の構成

序章

第1節 本研究の背景と問題の所在

第2節 本研究の目的

第3節 本研究の構成

第1章 ネグロス島の貧困概況

第1節 貧困の歴史

第2節 ネグロス島の貧困の構造

第2章 フィリピンにおける養蚕の概要

第1節 養蚕の歴史

第2節 地理・気候的条件

第3節 フィリピンにおける養蚕関連組織（政府関連機関、民間事業体）

第4節 フィリピン農業における養蚕業の位置づけ

第5節 ネグロス島における養蚕業の位置づけ

第6節 ネパール養蚕振興計画の事例検証

第3章 オイスカのネグロス養蚕プロジェクトによる

貧困緩和の実態と効果の解明

第1節 NGO オイスカとは

第2節 ネグロス養蚕プロジェクトの実態

第3節 ネグロス養蚕プロジェクトの効果

第4章 今後の貧困緩和対策に向けた展望

第1節 課題

第2節 提言

むすび

引用・参考文献

謝辞

付録: アンケート調査表

論文の概要

当初、フィリピン政府関係者からも非現実的だと指摘されていた、オイスカの養蚕プロジェクトが軌道に乗った背景には、いくつかの理由があると考えられる。一つは、養蚕プロジェクト開始前からのオイスカ活動により、人材育成に必要な手法や、地域住民との信頼関係が構築されていたため、比較的スムーズにこの事業が農民に受け入れられたこと。二つめは、養蚕で生産する繭と生糸の市場価値が高いため、効率的な所得の向上を図ることができたこと。三つめは、現地住民からすれば外国の NGO であるオイスカが、事業に関連する主体間のネットワーク作りを助ける接着剤としての役割を果たしたこと。そして、その人的・社会的ネットワークにより、民間レベルと政府レベルの関連機関（支援者）を上手くマッチングさせ、其々の限界を補完する体制を構築できたことにある。

以上のことから、オイスカによる養蚕事業の手法は、他の援助機関による貧困緩和対策を進めるにあたって、参考になる点が多い。しかし、これまで、その実態と効果について、断片的には報告書などで整理されていたが、系統立てて評価・分析されていたわけではない。そこで、本研究では、この事業の概要（実態・効果）を、系統立てて克明に解説することに重点を置いている。それによって、ネグロス島同様に貧困下にある他の地域においても、この事業の手法、実績を参考として活用できると推察されるからである。

まず序章では、本研究の背景と問題の所在及び目的を明確にし、研究の構成について述べる。

第 1 章では、ネグロス島の貧困概況を、フィリピンにおける貧困の歴史と、ネグロス島の貧困の構造という視点から述べる。貧困の歴史では、フィリピンにおいてスペイン植民地時代から続く、大土地所有制度の影響を色濃く残した土地の不平等分配が、貧富の格差を生み出している現実を解説する。ネグロス島の貧困の構造では、同島の伝統的なプランテーション型農業における、地主と小作人（農業労働者を含む）の関係と、大土地所有形態の実態を述べる。また、それにとまなう貧困構造を、経済の中心である砂糖産業の盛衰を通じて浮き彫りにする。このような恒常的な貧困が存在するネグロス島において、世界的な砂糖価格の暴落後、フィリピン政府の貧困緩和対策の立ち遅れから、ネグロス島農民の生活が困窮化した状況を述べる。

第 2 章では、フィリピンにおける養蚕業の概要について、その歴史的背景と地理・気候的条件、また、実際にどのような組織が養蚕業に関わっているのか、現地関係者へのインタビューを始め養蚕関連文献、政府ホームページなどを基に検証していく。さらに、2005年度の繊維産業統計表などを参照して、フィリピン農業における養蚕業の位置づけを明らかにする。ネグロスにおける養蚕業は、他の農業関連産業（砂糖キビ、トウモロコシ、稲

作、果樹など)と比べても過小な存在ではあるが、フィリピンの他地域と比較すれば、特出した規模であることを説明する。また、フィリピン国内では、オイスカ以外で養蚕事業を通じた貧困緩和目的のプロジェクトが存在しないため、比較対象の事例として、JICAが貧困緩和の一環として実施した「ネパール養蚕振興計画」について解説する。それに基づいて、フィリピン養蚕業との相違点を明確にし、フィリピンにおける養蚕業の後進性と改善点を述べる。

第3章では、この事業の実施主体であるオイスカの設立経緯と、その目的、活動の概要、さらに、フィリピンにおけるオイスカ活動と、ネグロス養蚕プロジェクト実施の背景について説明する。養蚕プロジェクトの実態では、各種オイスカ資料及び関係者へのインタビューを基に「養蚕」「人材育成」「ネットワーク形成」という3つの視点から其々の実態を解明する。養蚕の実態で特筆すべき点として、①養蚕製品(繭、絹布、生糸)は他の農産物と比較しても市場価値が高いため、農民へのインセンティブが大きく、自立心を高めやすい。②桑栽培は面積をとらないため、少ない農地でも複合農業を行なえる。③屋内での作業が中心であるため、女性、子供も含め家族全員で仕事を分担して活動できる、などの利点が挙げられる。反面、蚕の飼育は手間がかかると同時に、夜も眠れないほどの労働を余儀なくされるため、集中的な労働力が必要となる。従って、砂糖キビ農園のような雇用労働形態では、労働時間が超過するため採算は取れない。これが、大資本家が養蚕事業に興味を示さず、貧しい農家だけが継続している所以といえる。オイスカは養蚕業をネグロス島の新たな地場産業の一つとして位置づけ、農業多角化の一環として、砂糖キビ産業依存の経済体制からの脱却を目指している。また、貧困土地なし農民の有効な自立手段として、今後の養蚕普及活動をさらに促進する計画である。養蚕プロジェクトの効果については、まず、JICA 開発パートナー事業「ネグロス養蚕振興事業」によって、2000年以降の飛躍的な養蚕農家数の増加と施設の充実がなされたことを述べる。この結果、当プロジェクトの生糸生産が、全国生糸生産量の84%(2005年度)までを占めるに至った経緯を述べ、その普及効果を解説する。次に、筆者による養蚕農家への聞き取り調査結果に基づいて、養蚕による所得向上の実態を数値化して解説する。ネグロス島の貧困に苦しむ農民(各養蚕農家)の生活状況の変化について、養蚕開始前と開始後の所得の推移をグラフ化して分析する。さらに、「人材育成の効果」「ネットワーク形成による効果」の視点から其々の特徴をまとめる。オイスカを媒体に、多種多様な人的・社会的ネットワークが有効に機能することで、養蚕プロジェクトの自立発展性が持続されれば、ネグロス島の中山間地の農民の貧困緩和に貢献できる。そして、このようなオイスカのネットワークによる支援体制と波及効果をモデル化し、図で表している。

第4章では、養蚕プロジェクトの実態と効果を踏まえ、直面する課題を技術的な課題と社会的な課題とに分けて分析する。これらの課題を克服し、プロジェクトを継続させるための製糸工場経営健全化、絹織物などの養蚕業における川下産業を充実させることの重要性を述べる。さらに、市場の拡大が養蚕プロジェクトの持続発展性を維持するためには必

要不可欠である点を明確にする。養蚕プロジェクトの持続発展性を維持するためには、養蚕の技術研修と平行して、これらの川下産業に携わる人材の育成（製糸工場の運営管理、市場開発など）が重要な鍵を握る。これまでに解明された、ネグロス養蚕プロジェクトの実態と効果から導き出されたことは、その最終的な目標が、養蚕業をネグロス島の地場産業として、定着させることであることを論証する。

むすびでは、文献調査、現地聞き取り調査および事例研究を通じて、本研究の結論を導いたが、今後の課題となるべき不足部分も多い。また、事例研究では、ネパールの成功事例を取り上げたが、フィリピン国内の他の分野における貧困緩和の事例とも比較検証することで、本研究の有効性をより明確化することができると考えられる。世界的にみて養蚕・絹産業は衰退傾向にあるが、フィリピン国内の絹・生糸の需要は依然として高い。第 4 章の課題でも述べているが、養蚕業は、第一次産業（桑栽培、繭生産）を前提としている。しかし、輸出事業をはじめとした、生糸・絹織物生産や販売などの第二次、第三次産業の充実を図らない限り、養蚕プロジェクトの将来における自立発展性は望めないことも事実である。従って、今後の研究の方向性としては、ネグロス養蚕プロジェクトの商業的・経営学的な視点から研究することも重要課題であるといえる。